

「高校生の親子関係と心の成長」受講ノート

講師 名古屋大学大学院教育発達科教授 平石賢二先生

1 高校生の子どもと親の発達段階

高校生という世代は青年期中期にあたり、前期が中学生、後期が大学生になる。この青年期中期の子どもたちは、一人立ちを模索する時期であり、自律的な生き方を求めようとする。それは自分らしさとはなにか。自らのアイデンティティーを探求することと結びつき、友情や恋愛など、この時期に増えてくる人間関係の複雑な問題とも相俟って、青年期危機とよばれたりもする不安定な心理状態になりやすい。(たしかに、そういう時期だと思う。)

一方で高校生の親は、中年期に属する場合が多い。この時期になると老いの自覚が生まれ始め、身体能力の劣化を自覚するようになる。さらに、残された人生でどれだけのことができるか、若い頃の展望とは異なる時間的展望の再構成が必要になる。そして、夫婦関係も若い頃とは大きく異なってくる!!!。生き方のリセットと再構成が求められる。この時期もまた中年期危機と呼ぶに相応しく、第二の青年期ということも可能である。(たいへん良くわかる。)

以上のことから親子ともどもに不安定な心理状態に陥りやすい世代によって高校生の親子関係は構成されていると認識する必要がある。(なるほど!)

こういう状態では、子どもが心理的に揺れているとき、親も揺れていたりすると、共振を起こして問題が一層大きくなってしまふ可能性がある。(受験生の親は夫婦喧嘩など禁止ということです。)

2 高校生の親子関係の特徴

子どもは中学から高校にかけて親への反抗が強くなっていく傾向にある。それは心理的離乳という現象であり自分こそが正しいと考えている。したがって、親の言うことなど聴く耳をもたないという傾向が強い。(まったくもうだ。と我が家の子供たちの傍若無人ぶりに苦虫を噛み潰す。)そして、やがて親の立場を理解できるようになるが、それは大学生くらいになってからのこと。

親は次第に親としての役割が不確かになってくる。乳幼児期のような明確な親の役割は薄れ、子どもの成長とともに親の世話する範囲は狭くなっていく。(コンビニの世話が多くなる。金くれればいよって。)

親は家族の中での権威関係が変化してくることに適応する必要があり、子どもとの距離も適切にとっていくことが必要になる。親の子離れを始める時期。(一生懸命育ててきたのに。これは親の養育にたいする認識であり、子どもの認識は、ずいぶん手抜きして育てられたと思っているのかもしれない。)

親から離れて行こうとする子どもを距離を置きながらモニターし、危険から守るような態度(モニタリング)も必要。巣立ちには危険と裏腹の関係にある。

このように親子の関係性の中で反抗期と呼ばれるような問題も発生してくる。物事の決定における裁量権のあり方の認識も親子でズレていることが多い。青年期には自分で何事も決定したがる。(携帯に関するやりとりを

想起せよ。) 親は、そこまで譲れないというところがある。両者で交渉し合う相互調整が求められる。対立・葛藤と交渉という関係性。

3 相互性—共に成長するということ

威厳をもって子どもの心の成長を支えるという態度が必要とされている。親は子どもに要求し期待をする。その一方で子どもの思いを受け止めなければならない。この要求性と応答性のバランスの取れたコミュニケーションをとっていくことが求められる。甘やかしや放任的態度は見直すべきであろう。

子育てを通して親自身が成長するという見方も大切である。従来の発達心理学では青年期の問題は青年の心理状態だけを取り上げて研究してきたが、その親の心理という問題も近年ではテーマとして取り上げられるようになってきている。親になるということと、親自身が成長していくことは子どもとの関係においても重要な役割をになっている。

発達障害・問題行動などでカウンセリングをすると、それを乗り越えることで親が成長していく事例があると共に親が不安をぶつけ親自身の問題が子どもの問題を引き起こしているような事例も少なくない。

相互信頼感、親が自覚している養育態度と、子どもが見ている親の養育態度は、かならずしも同じではなく、往々にしてズレている。お互いに通じあう信頼感が親子関係を良好に保つ上で重要である。それが基盤となってこそ親から自立していく分離モデルが速やかに成功することになる。(しかし、それは長い年月を通して形成されるもので、そうそう簡単に修正することも難しいような・・・)

その後、高P連会長とのトークセッション。

会長 子どもと接する上で父親と母親の役割はどのようにあるべきか。

平石 父が威厳を持って母は優しくなどというジェンダー・ステレオタイプな考えは捨てるべきで、相互の関係性を大事にしていくべきでしょう。権威ある親に性別の区別はありません。ただ、ユング系の心理学では父親モデルや母親モデルを重視しているようですが、私が暮らしていたアメリカでは、とてもそんな性差による役割設定は受け入れられない議論だったと思います。

会長 子どもには人の迷惑にだけはなるなといって育ててきたのだが、どんなものか。

平石 カウンセリングの現場では、しばしば親からの縛りに身動きができずに引きこもってしまうケースがあります。また、青年中期の子どもは自分中心で物事を考える傾向が強く、親の言うことを聞いていません。私はむしろ上手に人に甘えなさいと言っています。